

---

# 魔術師とロザリオ

朋川禾弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔術師とロザリオ

### 【Nコード】

N67780

### 【作者名】

朋川禾弥

### 【あらすじ】

オカルトマニアな女子高生、麻里音はある日不思議な館に立ち寄った。

そこは魔術師達の住処で、魔術師達は魔術教団の教皇争いの真っ最中だった。

## 第一話 魔術師と女子高生？

穏やかな放課後

おがたみずき

この学園の一年生緒方瑞希は図書室にいた。  
中性的な顔立ちと名前だが男子生徒である。

目の前には同じクラスの女子、神崎麻里音が華奢な身体に  
不釣り合いな分厚い本を積み、ヨタヨタと歩いていた。

「手伝おうか？」

彼女と話す機会はさほどなかったが  
反射的に声をかけた。

「緒方君・・・？」

瑞希に声をかけられたのがよほど意外だったのか  
神崎麻里音はあっけにとられていたので  
瑞希は上の本を数冊持ってやった。

本のタイトルに目がとまる。

「イイ趣味だね」

本のタイトルは”悪魔の召喚儀式”や”呪いの方法”など、  
お菓子作りの本などを楽しそうに読んでいる

甘いイメージがあったのだが、180度違ったようだ。

「部活の資料なの」

「部活？」

「うん、オカルト研究部だよ」

瑞希はオカルト研究部に案内されることとなった。

— — — — —  
— — — — —  
— — — — —

部室でお茶を入れるなんて

茶道部くらいだと思っていた。

魔女のお茶会でも意識しているのだろうか

ハーブティーを入れてくれた。

麻里音は自分の分を砂糖をいれるとスプーンを  
右回りに三回回したかと思うと今度は左に三回、  
そしてまた右回りに三回と繰り返している。

「それはおまじない？」

「そうなのっ」

瑞希の質問に対し、麻里音は目を輝かせて答えた。

「ふふ、そういうのが好きなんだね」

「うん、私魔法とか魔術とかが大好きなんけど  
私は魔法が使えないからこうやっておまじないを  
日常生活にいれてるの。」

こんな事言っていると変な子って思われちゃうかもしれないけど」

「変じゃないよ」

瑞希は即答した。その眼差しがとても優しく感じる。

「本当？特に男の子はおまじないとか嫌がるかと思ったんだけど  
緒方君ってきつとそういうところがモテるんだね」

「も・・・モテる？」

「あれ？気づいてないの？？」

「うーん、そんな事ないと思うけどなあ」

興味なしといった瑞希の頭は

「はたして彼女意外に部員はいるのだろうか？」

という疑問に支配されていたがあえて聞かないことにした。

## 第一話 魔術師と女子高生？

「今日こそは・・・」

麻里音は以前から気になっていた怪しい洋館の前にいた。

ちょっとした山のようになっており、  
前と言っても階段を上った先には門がある。

木々が生い茂った街中には不自然な土地だった。

この洋館はいつからそこにあつたのか

子供の頃からあつた気がするし突然現れた気もする。  
記憶が曖昧になってしまっている。

家族や友達に聞いても誰に聞いてもが昔からソコにあつた  
といわれるが麻里音には納得できなかった。

それが麻里音のオカルト好きを刺激する結果となってしまう  
のだ。

しかもオカルトテイストな佇まいは好みそのものであり  
麻里音の趣味にぴったり当てはまっている。

あわよくば中には魔術師が夜な夜な悪魔を召喚しているかもしれな

い。

そんな妄想が滝のように流れ出し、止められるはずがない。

（興奮して鼻血でそう）

心の中で乙女とは思えない眩きを吐いた直後誰かに呼ばれた。

「あれ、神崎さん？」

「きゃあああっ」

「ご、ごめんっ」

麻里音に悲鳴を上げられ瑞希はとっさに謝った。

「お、緒方君！？」

声の主は緒方瑞希だった。  
今日はなんだかよく会う。

「どうかした？ここ俺の家なんだけど」

「そうなの！？」

なんと以前から気になっていた  
館の住人は緒方瑞希の家らしい。

瑞希からすれば麻里音は不振人物意外の何者でもないだろう。

とはいえ、もしかしたら緒方瑞希は魔術師なのかもしれない  
そう思ったら止められずにジロジロと全身を嘗め回すように見てしまっている。

「……よかったら上がっていく？さっきのお茶のお礼したいし」

瑞希は多少若干引き気味に尋ねたが気遣いは忘れない。

「いいの！？どうしよう、なんだか緒方君が王子様じゃなくなって  
魔法使いだったらどうしようってワクワクしてきちゃった」

「！」



両手で顔を多いながら顔は赤面している。

神崎麻里音はいちいち女の子らしい仕草をする。  
これじゃまるで恋する乙女のようにようだ。

麻里音の言葉に内心では驚きつつ

瑞希は笑顔で言った。

「あんまり期待したら、後でがっかりしちゃうよ」

「こういう洋館にお呼ばれすること事態夢だったから  
そんなことないよ・・・あの、迷惑じゃなかったら・・・」

大丈夫むしろ歓迎されるからと言われ

誰に歓迎されるのかと麻里音は疑問に思いつつ館の中に通された。

「お邪魔しまあす」

期待通り趣味のいい内装が施されている。

埃が溜まりそうな廊下の絨毯も綺麗に掃除されているしカーテンも  
ベルベットで統一されている。

どこかの貴族が住んでいそうな雰囲気をかもし出している。

「ちょっと待ってね」

そういつて瑞希は大きな扉の前に立ち、金色のノブを回して扉を開けた。

「ただいま」

瑞希は中に居る人に声をかける。  
お母さんかな？ と思っていると中からは少年と若い青年の声が聞こえた。

「おかえり」

「お帰りなさいませ」

「もー、瑞希君が遅くてお茶冷めちゃいそうだから  
先にお茶しちやってるよ」

上座の大きな椅子の上に座る銀色の髪の少年が言った。

白のブラウスに黒のジャケットとズボンを着て昔の外国の貴族のよ  
うな格好をしている。

「……待ってくれたためしなideしょ？  
そんな事よりさ、お客さん連れてきたんだ、いいかな？」

「お客さん？」

「同じクラスの神埼麻里音さん」

「あ、お、お邪魔します」

瑞希の後ろから麻里音は控えめな挨拶をした。

中に居た二人を確認し、目が合う。

（うわぁ……綺麗な男の子……）

確かに瑞樹も女顔であるが、少年は12，3歳と思われる年齢から  
余計に中性的に見える。

麻里音を見るや否や少年は勢いよく立ち上がり  
瑞希達の方へ近づいてきたと思うと

「瑞希君！……！」

名前を呼びしつかりと瑞樹の両手を掴んだ。

「ありがとう！ありがとう！！

ついに僕との約束を果たしてくれたんだね！？」

「いや、その・・・」

たじろぐ瑞希とは逆に少年の勢いは止まらなかった。

「瑞希君ったら、折角共学の高校行ってるのにちーっとも女子高生の友達をこの家に呼んでくれないんだもん！

どうせ学校でモテてるくせに独り占めしてさ！

この僕を差し置いてハーレムなんておこがましいよ！！

おこがまし過ぎる！！羨ましい！！まったくもって羨ましい！！」

「何言ってるの」

少年とは対極に瑞希の反応はすこぶる冷たい。

しかしそんな瑞希の事は眼中から完全に消えうせたように少年は麻里音の方へ笑顔を向けた。

「ようこそ、今執事がお茶を入れてくれるから席どうぞ」

少年の麻里音へのエスコートは妙になれていた。

「ど、どうも」

「敬語なんていいよ麻里音、僕はユーリよろしくね」

「さっそく呼び捨て？」

笑っているかのように見えるが瑞希の目は笑っていなかった。

ユーリの方も無視を決め込んでいる。

そんな中、銀製のティーポットとカップを携えた執事が部屋に入ってきた。

「どうぞ、チェリーのクラフティーとアッサムでございます。」

「わぁ、美味しそう」

チェリーの甘酸っぱさが甘さを和らげてとても食べやすく美味しい。

幸せそうにクラフティーを貪る麻里音を

ユーリは目の前のお茶にも手をつけずに愛でるように眺めていた。

「可愛いなあ麻里音」

「グッ、ゲホッゴホッ」

ストレートなユーリの呟きに思わず瑞希はむせた。

「おやおや、大丈夫ですかあ瑞希君。おっちょこちよいですねえ」

執事がクスクス笑っている。

執事としての能力は高いが性格はあまりよろしくないのかもしれない。

「へえ、麻里音はオカルトに興味があるんだ」

最初は緊張していたもののユーリの気さくな性格にすっかり打ち解けていた。

「ウチにも少しそういう本があった気もするしよかったですら見ていく？」

「いいの!?!」

「うん、そのかわり・・・」

ユーリが何か言いかけた直後麻里音の視界が黒く染まった。

「停電!?!」

座ったまま立ち上がらずにあたふたとしている

刹那

ガシャァン!!!!

今度はガラスの割れる音がしたので部屋に居た  
誰のものでもない怒声が部屋の中で響き渡ったのはほぼ同時だった。

「クタバレ瑞希!!!!!!」



## 第一話 魔術師と女子高生？

（あの馬鹿！！）

「なになに！？」

一人状況を把握できていない、どうすることも出来ない麻里音の手を誰かが握り締めた。

「大丈夫だよ、麻里音」

声と手はユーリのものだった。

いつのまにこんなに近くに來たのだろうか  
暗闇の中とても近くにその存在を感じ、安堵を与えてくれた。

二人だけの空間のように錯覚してしまいそうになりかけたが  
別の声が頭上から聞こえた事で麻里音は現実引き戻された。

「ユーリ様、麻里音さん大丈夫ですか？」

執事がろうそくを持って来てくれた。

あの状況でそんな動きが出来るなんて、この家の住人は夜目がきくのだろうか？

「大丈夫だよ」

言葉を失っている麻里音の変わりにユーリが己の執事に向かって言った。

（どうしよう、年下なのにドキドキしちゃった）

カーテンを開け放ち部屋全体に光が差し込んだ。  
やっと目が暗闇から開放され部屋を見渡してみると瑞希がいないことに気がついた。

「あれ？緒方君がいない」

「瑞希君なら怖くて外に飛び出して行ったんじゃないかな」  
「きつとトイレ辺りに逃げ込んだんでしょ」

ユーリと執事は少し維持の悪い笑みを浮かべている。

「そう……」

「ごめんね、麻里音。電気の調子がちょっと悪いみたいだから  
今から見てまわろうと思うんだけど」

ユーリの言葉に察し、麻里音は慌てて答えた。

「あ、こっちこそ急にお邪魔しちゃってごめんなさい」

「また来てくれたら嬉しいな」

「また来ていいの？」

「もちろんだよ！男ばっかでムサ苦しいったらないよ  
麻里音が来る前に電気を整えておかないとね」

「どうもすみません、と言いたいところですが  
こっちだって同じ意見ですよ、ユーリ様」

執事は笑みを絶やすことなく言った。

とても主人に対しての物言いとは思えない。

「それではお気をつけてお帰りくださいませ」

「お邪魔しました。」

執事が玄関まで送ってくれて、麻里音は屋敷を後にした。

「行っただか」

窓からヒョッコリと少年が顔をだした。  
庭へ潜んでいたらしい。

「うおっユーリ」

ユーリが腕を組み傍に立っていた。

「はーあ、せっかく可愛い子と親密になれるチャンスだったのに本当空気読めないよねえ君」

「なんだよ」

謝りたい思いとは裏腹に

ユーリの話している内容のお陰でなんと切り出そうかわからなかった。

「ユーリ様、朋君に空気を読めというのは  
犬に逆立ちしながらリンボーダンスを命じると同じことです」

「なんだと眼鏡執事!!」

「アーーーーアーーーー!! じょーしこーせーーーーいつ」

「うるせーーーー!!」

「おい、俺に相手してほしいんだろ?」

振り返ると瑞希が立っていた。  
朋と同じく停電の後庭にいたらしい。

「してやるよいくらでも」

「おーこわ、屋敷に被害が及ばないように最小限に抑えてよね」

「そんなヘマはしないさ」

瑞希がそういうとユーリはパタンと窓を閉めた。

「まあ俺は時期” 教皇” の座なんてどうでもいいんだけど」

「!」

「かかって来なよ、その件で来たんだろ」

刹那

瑞希の身体を光が包み差し伸べた手のひらからはクリスタルが現れた。

「あゝいや・・・」

朋が何やら困ったように目を逸らした。

「?」

「いや、久々に手合わせしてほしかったただけでさ  
俺も別に教皇とかどうでもいいんだ」

朋の言葉に瑞希は目を見開いた。

「な、なんだって!？」

よりによってこの時期に紛らわしいことすんな!!

お陰で一般人に俺らの正体がバレる所だったんだぞ!？」

物凄い勢いで朋につめより攻め立てた。

「悪かったって悪かったって!!!」

朋の必死の抗議にも瑞希の怒りはおさまらない。

刹那黒髪で少しツリ気味の瞳が印象的な少女が突然魔法のように現れた。

メイド服のようなフリルがあしらわれた可愛らしい格好をしている。

「クリスタル反応を感知いたしましたので

時期教皇争いの勝負を見届けに参りました☆

・・・って、あれ？」





「お久しぶりでございます、ユーリ様」

「ああミーナか、教皇争いのハンデと称して僕をこんな姿にして以来だね」

「もしかしてユーリ様怒ってます？」

「別に、ただ」

「ただ？」

「こんな姿じゃ女の子を口説き難いじゃないかっ  
ああ、せめてシヨタ好きの美人で巨乳のお姉様といい感じの出会いがあればなー」

「・・・」

嘆かわしそうに大げさに仰ぐユーリに  
ミーナは冷ややかな視線を向けた。

## 魔術師とクッキー？

香ばしい匂いに誘われて台所に行くと  
妹の麻里音がピンクのエプロンを身につけ  
機嫌よく料理中だった。

「出来たっ今日の日曜学校のクッキー」

焼きたてのクッキーを二つの皿の上に乗せていく。  
美味しそうだったのでそのうちの一枚を手にとると  
麻里音は焦った様な顔をした

「あっダメダメそれは今から持ってくんだから  
食べるんならこっちにして」

「なんだ、彼氏でも出来たか？」  
手にとった一枚のクッキーを口に運ぶ。  
サクリと音がなりバターと砂糖の香ばしい味が口に広がった。

「そんなんじゃないもん」

それにしては妙に嬉しそうだったり顔が赤くなったり  
ムキになったりと忙しいものだ。

言い訳のように急に言葉をまくしたてて来たかと思うと  
後続く内容は予想だにしない物だった。

「ほら、前から気になるって言ってた洋館あるでしょ  
ついに家の人と仲良くなったのよ！  
しかも住んでたのは同級生の緒方君だったのよ

今からこのクッキーを持っていくの」

なんだって？

一瞬耳を疑った。

「・・・そうか、まあ気をつけてな」

「うん、私出かけるから  
お昼に皆で食べてね。行ってきまーす」

「どうしたもんかなあ」

駆けていく妹の背中を見送り苦笑いで  
麻里音の兄、響はつぶやいた。

「お邪魔しまーす」

この屋敷に来るのは二度目だがまだ緊張するのか  
小声でおそろおそろ敷地に足を踏み入れた。

玄関ベルを鳴らそうとしたが  
ふと庭先が気になり足を向けると

スラリとした青年が背を向けて立っていた。

（誰？）

後ろを向いていた青年が視線を動かした。

少しづつ横顔があらわになった。

それをただ見つめていると見知った顔に良く似ている気がした。

「……ユーリ君？」

声に青年は振り向いたが

その時には背の高い青年ではなく

背の低い小柄な少年、ユーリへと変わっていた。

「あ……あれ??」

「麻里音? どうしたの?」

一瞬驚いた表情を見せたユーリだが  
スグに優しい笑顔に変わりこちらへ歩み寄ってきた。

「今、ユーリ君がなんだか大人に見えて・・・  
ううん、なんでもない。」

「!？」

麻里音はいいかけてやめて話を切り替えた。  
ユーリの顔色が変わった事には気づかなかったようだ。

「あのね、クッキー焼いたんだっ」

「わぁ！お茶入れるから上がってよ」

話題が変わるとユーリもそれに合わせた。

「へー、麻里音のお父さんは牧師さんなんだ  
なのに娘はオカルト好きって何か面白いね」

「パパはあんまりいい顔しないけどね」

「ふふ、ギャップがあっていいじゃないか」

クッキーは二人の中央に沿えられ  
ティーカップにはフレーザーバーティーが注がれている。

「あー腹減った……」

眩きながら扉を開けて麻里音の知らぬ男の子が入ってきた。  
歳は麻里音と同じ年くらいだろうか

「うおっと!？」

少年は麻里音と目が合った瞬間素っ頓狂な声を上げたかと思えば  
扉に半分隠れながらこちらをうかがってくる。

見た目年齢よりも落ち着きがないのかもしれない。

そんな少年とは逆に見た目よりも随分大人びた

ユーリが声をかけた。

「入っといでよ朋君」

朋と呼ばれた少年は恐る恐る部屋に入ってくると指をくわえて麻里音のクッキーを食い入るように見つめている。

「瑞希君の親戚なんだ見ての通り食いしん坊のおバカさんだよ」

「誰がおバカさんだクッキーよこしやがれ」

「お腹すいてるの？私が焼いたものでよかったです」

「お、サンキュー！」

朋は席につくなりクッキーの皿を自分の方へよせて勢いよく食べ始めた。

「やったね麻里音、餌付成功だね☆」

「一々うるせえよ、よかったら飲み物もくれ」

「はいはい、単細胞おバカな朋君」



とても人に頼む態度ではない朋の背後にいつの間にか執事が立っていた。

朋が入ってきたときは部屋にはいなかったはずなのだが。

「うるせえ眼鏡執事！おかわり！」

そんな執事へ疑問を抱くでもなく注がれたお茶を一気飲みするとおかわりを要求し始めた。

「失礼な上に何のひねりもないセンスのないあだ名ですね  
アナタらしいといえばらしいですが  
辛亥です。」

執事は笑みを消しながらもカップにはきちんとお茶を注いでやっている。

「やけにネチネチした言い方だな、辛亥の一言でいいだろ  
嫌味眼鏡とかネチネチの方がよかったか？あ、ネッチーとかどう？」

執事からカップを受け取ると今度は一口ずつのみなながら言い放った。

「承知致しました。本日のディナーは朋君だけナシという事で」

「きたねえっ！」

そんな二人を見かねたユーリは麻里音に呼びかけた。

「二人は放っておいて他の部屋へ行こうか」

朋と執事のやり取りが面白く感じていた麻里音だがすぐに屋敷への興味へ移る事となった。

瞳を輝かせてユーリの提案に頷いた。

「わあ、結構色んな本見たと思ってたけど始めてみる本ばかり」

「喜んでくれて嬉しいよ」

床に本を広げて色々な話をした。

ユーリは笑わずに話を聞いてくれてどうでもいい疑問にも「仮説」を使って一緒に考えてくれる。

こんなにもオカルトに関して人と話をしたのは初めてだった。30分ほど談笑したのち部屋に瑞希が訪れた。

「ユーリ、この本……あれ、神崎さん？」

「こんにちは緒方君」

瑞希は麻里音が来ていた事を知らなかったようでかなり驚いている。

「麻里音がクッキー焼いてきてくれたんだけどごめーん、全部食べちゃった」

（本当は朋が馬鹿みたいにほとんど食べちゃったけど）

全然申し訳なさそうにユーリが陽気に言ったのに対し

「ごめんね緒方君っ今度は緒方君の分も作ってくるから」

麻里音は両手を組んで瑞希に申し訳なさそうに言ったので  
変わりにユーリが口を開いた。

「ええっいいいいいようせ毎日学校の・・・女子高生から  
手作りのお弁当とかお菓子やらをもらってるんだし」

「だからもらってないって」

「おこぼれ全然くれないんだから、麻里音のは全部僕によこしなさい」

ユーリが一指し指を瑞希に向かって言い放つと

勢いよくドアが瑞希によって閉められた。

ボタン!! と音がなると麻里音はビクリと肩を震わせたが  
ユーリはさほど気にすることもなく

「もう、ほんと冗談が通じないんだから♪」  
と何処か楽しそうだった。

## 魔術師とクッキー？

学校での休み時間

瑞希は次の授業の用意をしていた。静かだが真のある声に呼び止められた。

クラスメイトの黒川<sup>くろかわまや</sup>摩夜が立っていた。

緩いウェーブのかかった長い黒髪がよく似合い、ミステリアスな雰囲気<sup>きんき</sup>を漂わせている。

「ま・・・黒川さん？」

「ちよっと顔かしてくれるかしら？」

その一言に賑やかだったクラスの空間がシンと静まり返った。

学校の人気者である緒方<sup>おがたみずき</sup>瑞希に

美人だが大人しいハズのクラスの女子が信じられない一言を放ったのである。

本人に人気者だという自覚はなくとも、

今のクラスの空気にいたたまれなくなった瑞希は  
逃げるように教室を後にした。

「どうしたの？学校では他人の不利しようって言ってきたのは  
君の方じゃなかったっけ？」

「そうよ、私が作ったルール。私の私による私のためのルール。  
すなわちこれも私のルールに準じているの」

普段は「摩夜」「瑞希」と呼び合っているが

苗字で呼び合おうと言い出したのも摩夜の方である。

「そ、そう」

（相変わらずだなあ・・・）

ツツコミをいれたらきつと十倍返しされるので  
聞き流すことにした。

「麻里音を屋敷に呼んだそうね、どうして？」

神崎麻里音と摩夜がとても仲のいい友達だと言う事は瑞希自身も良く知っている。

「どうしてって、成り行きだよユーリの屋敷の前でばったり会ったから」

「そう、偶然なのね」

「・・・そうだけど、何かまずかった？・・・っておい真夜！」

瑞希の言葉を待たずして摩夜はスタスタと教室に戻ってしまった。

「勝手だなあ・・・」

瑞希と摩夜は小さい頃から互いを知っており  
瑞希やユーリ同様摩夜は魔術師なのだ。



だからこうやって学校では互いの存在を気付かれぬよう距離を取っていた。

「お帰り摩夜ちゃん緒方君、お話終わった？」

教室へ戻った二人を麻里音が出迎えてくれた。

「ええ、しめ終わったたわ」

「緒方君をしめてたの？」

麻里音はキョトンとした表情で聞き返した。

「まあ近いものがあつたよね・・・」

その問いに瑞希が目を逸らしながら答えた。

## 魔術師とクッキー？

「オカルト研究部って神崎さんだけじゃなかったんだ？」

「私と摩夜ちゃんと巴ちゃんだよ」

巴ちゃんとは天宮巴あまみやともえといい

麻里音と摩夜とは仲良し三人組であり三人の中で一番小柄な少女である。

摩夜にしめられた後は残りの休み時間はこの三人と雑談する事になった。

「そういえば天宮さんの家って神社じゃなかったっけ？」

「う、うん。」

「こんな怪しげな部活なんて入って大丈夫なの？」

失礼なのは承知だが、気になったので尋ねてみた。

「怪しげとは何よ」

「怪しくって素敵だよねっ」

ムツとする摩夜と嬉しそうな麻里音。

（そういえば神崎さんに摩夜が魔術師ってバレてないみたいだ）

ましてや摩夜がそんなヘマをするようには思えないが

「麻里音ちゃんと摩夜ちゃんがいるし」

人見知りのせいか、小さな声で恥ずかしそうに呟く巴を見て瑞希は察した。

「完全に巻き込まれている」と。

麻里音が暴走し、摩夜には旨く丸めこまれている状況を完全に把握した。

「でも、私靈感なくって全然役に立てないんだ」

「へ？ 靈感？？」

何を突然。

（天然？）

魔術師ならともかく普通の人間に靈感なんて普通求めない。

「お兄ちゃんは霊が見えるみたいなんだけど・・・  
あっ・・・でも本当に見えてるかどうか」

「巴、樹さんが霊の事以外でなたに嘘をついた事があったかしら？」  
あたふたと話す巴に摩夜が優しく問いかける。

「え・・・うつ、ない・・・けど」

「だったら、靈感も本当じゃない。樹さんは嘘なんて付かないわ」

「うえっ・・・でも摩夜ちゃん  
だったら本当に幽霊が存在するって事で・・・  
昨日だって！ 誰もいない壁に向かって何かブツブツ会話してるし！」

「じゃあ、昨日も幽霊が出たんでしょうね」

摩夜は聖女のような微笑で残酷な一言を放った。

「やめてえええ」

ボリユームの小さい悲鳴を涙を浮かべながら手は耳をふさいで首を横に振る様子を

摩夜は小動物をめどのように顔を赤らめて見つめる。

こんなに嬉しそうな摩夜を瑞樹は初めてみた。

苛めて楽しんでいるようにも見えなくもないが

（本当にこの二人が好きなんだな摩夜は）

「うわぁ、昨日もお家に幽霊が?? 素敵だね！」

その中で麻里音はまた一人ズレた事を言っていた。

## 魔術師とクッキー？

その日の昼休みは三人と昼食をとる事になった。

「そういえば緒方君っていつも購買で買ってきてるよね」

「あ、うん。ユーリの家にいる執事、クレノっていうんだけど別にあいつの手作り弁当なんて食べたいと思わないしなるべくアイツに借りを作りたくないんだ」

何故か眩しい笑顔で言い放った瑞希に  
麻里音は深く追求することが出来なかった。

「そうなんだ」

（あの執事さんと仲よくないのかな？）

「神崎さんはいつもお弁当だねお母さんが作ってくれてるの？」

「私お母さんいないんだ」

「えっ。ごめん」

「ううん、物心ついたらいなかったしお兄ちゃんとお父さんがいるし三人で分担したり、交互にやってるのよ。今日は私がお弁当を作る日なの」

「偉いなあ。お弁当も美味しそうだし」

「よかったら少し食べてもらえる？」

いつも美味しい執事さんの料理を食べてる緒方君に味をみてもらいたいの」

「じゃあ頂きます」

差し出されたお弁当に手を伸ばし、コロツケのようなものを貰う事にした。

「それは昨日作った肉じゃがが余ったから、コロツケにしてみたんだ」

「美味しい」

素直に美味しかった。優しい味がする。

「本当はね、お兄ちゃんやパパが作った方が美味しいんだけど」

恥ずかしそうにだけど楽しそうに話す麻里音は

オカルトの事を語っている時と同じくらい嬉しそうに見える。

オカルト好きというか、色んな趣味を持っている子なんだと麻里音の事を再認識した。

自分は生きるすべの一つである魔術にすがって生きていて趣味といえるものってそういうええじゃないかもしれない。

「とっても美味しいよ」

今度は呟きではなく、ちゃんと麻里音の方を見ながら言っただけだと隣から視線を感じてみると

「な、なに？」

摩夜が黒いオーラを放ちながら睨んでいた。先ほどの巴への態度とはまるで真逆だ。

「別に、何もないわよ緒方」

（苗字呼び捨てになってる！？）



## 魔術師とお人形？

軽い衝撃が夢から現実へとユーリの背中を押し、それと共に不快感が押し寄せてきた。

「ん・・・」

目覚めの一步寸前のまま再び夢の中へと足をむけた。

そんな様子を見て布団を剥ぎ取った瑞希はユーリを見下ろしながらあきれ果てた。

「まだ寝てたんだ、何時だと思ってるの？」

ユーリは目を閉ざし顔をマクラに埋もれさせながら力なく言葉を紡いだ。

「僕は夜型なんだよ、それにこんな明るい時間から夜這いなんて趣味悪いよ瑞希君」

ユーリの言葉にいらだった瑞希はカーテンを開け放つという強硬手段へと踏み込んだ。

一気に部屋の中へと光が照らされる。

「うああっ眩しい！溶ける！！溶けちゃうっ！」

「大げさだな・・・そんなに元気ならさっさと起きなよ」

「むりい、瑞希君の鬼畜う。」

美少年の僕相手に鬼畜プレイを楽しむなんて瑞希君の変態」

気だるげな物言いが一層苛立ちを掻き立てる。

（どうしよう、本気で殺意沸いてきちゃった）

その時

パンツ

静かな戦いが繰り広げられる中、今度は執事によって部屋の扉が勢いよく開かれ、執事はそのままズカズカ部屋に入ってきたかと思うと

ユーリのシーツをひっぱり、そのままユーリを床へと落とした。

誰が見ても主人と執事の関係には見えない。

「なにすつ・・・さては寝込みを襲いに!？」

「違います」

きっぱりと言い放った執事は冷めた口調で淡々と続けた。

「毎日毎日寝室でゴロゴロされるとお掃除が出来ないんです。

邪魔なんで外でてってください」

「う……酷いっ家出してやるっ」

「あ、掃除終わるまでは帰ってこないで下さいね」

本当は引き止めて欲しいなんて言えなかった。

「バカーーーー!!」

先ほどのグダグダした様子とは一変して、  
寝起きとは思えないほどにユーリが勢いよく部屋を走り去っていった。

と、思ったらまた戻ってきて  
ドアから顔をだしてこちらを見つめながら謙虚にお願いした。

「ごめんなさい、僕が悪かったです。せめて着替えを下さい」

**魔術師とお人形？（後書き）**

続きます。

## 魔術師とお人形？

「何か妙に人が多い気がする。  
綺麗なお姉さんとかに声かけられたらどうしよう。」

トボトボと目的もなく歩く少年の姿があった。

ユーリの外見は普通の人間からしても  
何処か浮世離れしているように感じられ

買い物途中の麻里音は視界にかすかに写ったユーリの後ろ姿を  
すぐに見つけることになった。

「ユーリ君っ」

「あれ、麻里音。」

そうか今日は土曜か日曜か、引き籠ってると  
曜日の感覚がなくなっていけないな。」

昼間だというのに私服姿で買い物をしている麻里音を見たことで  
平日ではないという事が分かった。

そんなユーリを麻里音はまじまじと見つめた。

「私もしかしてユーリ君って、御屋敷から出られない呪いでもかけられてるのかと思ってたんだけど普通引きこもりだったんだね」

ユーリは悪意のカケラもない笑顔に固まったが麻里音は気にした様子もなく続けた。

「凄い偶然だね、滅多に外に出ないユーリ君と会えるなんて。」

「偶然は必然だよ麻里音。」

偶然を偶然のまままで終わらせるか、必然と認識するか否か。こういう些細な事を見逃さない心が魔法を育てていく  
「……のかもしれないね」

ユーリの言葉に麻里音の顔は綻んだ。

大好きな魔法の話。いつもは興奮するかのようには思えたが何故かその言葉は暖かく安らぎを与えてくれた。

するとユーリはさっきまでの大人びた顔つきを一変させ、少年らしい明るい表情と声にきり変えて発した。

「偶然は必然だね・・・そう運命。僕たちが今日会うためにきつと鬼畜野郎共は遣わされたんだな運命に、うん」

「？」

「よかったらこれから何処に行かない？」

「わぁ、行きたいけど

晩御飯のお買いものをお家に置いてきてからでいい？  
結構近所なのよ」

「もちろんいいとも」



数分歩いたのちに見えた麻里音の家。

家の敷地には教会として使っている建物と、  
住居用の建物の二つが並んでいた。

（不思議な感じがする・・・）

ユーリは教会を見上げた。

教会独特の魔を寄せ付けない神聖な力が宿っているが

その力が少々強すぎる気がしないでもない。

その神聖な力にも少し魔が感じられる気もする。

いくなれば魔で魔を防いでいるような。

「お待たせーユーリ君」

荷物を置いた麻里音が家から出てきた。

教会の雰囲気になるが、まずはデートだとユーリは自身に言い聞かせた。

「さあ、何処に行きたい所はないかな？」

麻里音との初めてのデートだし何処がいいかな」

「え・・・でーと」

麻里音は不意の言葉に顔を赤らめた。

その新鮮な仕草がユーリには堪らなく可愛く思えた。

オカルトにご執心な少女は異性関係には疎かったらしい。

「あのね、最近見つけたカフェに行きたいんだけど」

「いいね、僕鬼畜コンビに追い出されて朝から何も食べてなかったんだ」

二人は歩きだし、しばらくすると麻里音が足を止めた。

「あれ？雑貨屋さん？こんな所にあったっけ？」

「気になるのかい？」

気になるのはユーリの方も同じだった

というのも店全体から魔力を感じるのだ。

二人は数段の階段を上がったのちに開け放たれたままの  
入口をくぐった。

「わあ、アンティークのお店ね」

小さな店内に所狭しとアンティークが飾られている。  
量はかなりのもだが決してゴチャゴチャした感じはなく  
計算されたセンスの良さを感じる。

「いらっしやい」

細身の若い男の店員が声をかけてきた。

「可愛いお店だね」

麻里音は隣にいるユーリに言った。

ユーリはにこやかに対応するも置かれてあるアンティークに目を配った。

そうしているうちに麻里音が置かれてあった人形に手を差し伸べる。

「わぁ、可愛いお人形」

金色の巻き髪に青い瞳。ほんのりと化粧を施された上品な顔立ちの白いドレスを纏った人形が座っていた。

「よかったら差し上げましょうか？」

「え、でも・・・」

「いいんですよそれは元々売り物ではなかったのだから気にいってくれた方に差し上げようと思っていたんです」

「ユーリ君、お人形貰っちゃった」

嬉しそうに人形を抱える麻里音にユーリは固まった。

というのも・・・

（麻里音それ、明らか中に悪魔が入ってるよ！！）

「よ・・・よかったね」

ユーリは引きつった顔で対応した。

## 魔術師とお人形？

二人は当初の予定通り麻里音のいていたカフェへと入った。

麻里音はレモンシフォンパイ  
ユーリはフロマージュモンブランを頼んだ。

向かい合って座る麻里音は膝の上に人形を置き嬉しそうにしている。

「名前どうしようかなあ」

（名前！？）

悪魔が宿った人形に名前をつけようとしている。  
これは結構マズいかもしれない。

「うーんと、金髪で巻き髪だから・・・金田チョココロネってどうかな？」

「かねだ・・・」

麻里音は気付いていなかったようだが、  
人形、もとい金田チョココロネの腕がピクリと反応した。

「い・・・いいと思うよ」

適当に相槌を打つとユーリはこの状況の打開策を一人考え始めた。

カフェから出ると公園を通って道を抜ける途中甘い香りが鼻をくすぐった。

「あ、クレープ屋さんがあるよ」

ユーリはワゴン車型のクレープ屋を指差した。

「さっきケーキ食べたばかりなのに足りなかったんだねクスクス」

「うん、僕チョコのやつ食べたいな」

「いいよ私も甘いものはどんどん入るから買ってくるね」

クレープ屋に向かう麻里音の姿を確認し、ベンチに置いてある金田チョココロネに向き合った。

「金田チヨココロネ」

名前を読んでみるとチヨココロネは力強く腕をベンチに振り下ろした。

（よっぽど嫌なんだな・・・）

先ほどの控え目な反応より大分大胆な動きを見せた。

ガシッと金田チヨココロネの頭をつかむと

茂みに入り、転がっていた枝を適当に拾って慣れた手つきで素早く魔法陣を描いた。

その間も金田チヨココロネは手足をバタつかせる。

「大人しくしろっ」

魔法陣が書き終わると陣の中にチヨココロネを乱暴に投げ入れ急いで草むらから出た。

「間に合ったか」

ベンチにまだ麻里音の姿はない。

「お待たせ」



麻里音がクレープを両手に二つ持って帰って来た。

「あれ？チョココロネは？」

「チョココロネは・・・」

魂が宿っていたようでききなり起き上がって公園を爆走して駆け出して行ったよ」

「ええ！？」

流石に無理があったか？

ユーリの心配を余所に麻里音が反応した。

「凄い！！私も見たかった！！」

（僕何気に麻里音の扱い上手いかも・・・）

ユーリ達がクレープを食べている頃

館では朋がユーリを探して部屋を訪れていた。

「おーいユーリ！」

「何だ、眼鏡執事しかないのか」

中では執事がせっせと主の部屋を掃除していた。

「何ですかユーリ様に御用ですか？ノックもせずに失礼ですよ」

ムツとする執事を無視してズカズカと部屋に入つた朋は床に描かれた魔法陣に興味をしめし近付こうとしたその時

ボトツと

音がしたと思ったら

魔方陣の中に少女の人形が出現した。

「ギヤ——！！！！」

「こっ腰が……！腰が抜けた！！」

タイミングが悪かったせいでその場にへたり込んでしまい逃げるに逃げれない状態となってしまった。

朋の悲鳴にイラッとした執事だったが人形の出現に気づいて  
近くまで来て観察し始めた。

「これは・・・中に悪魔が入ってますね」

「ホギヤーーーー！！！！！！」

「朋君・・・あなた魔術師でしょう  
しかも時期教皇候補の一人でもある。悪魔を怖がってどうするんですか」

「こういうモノに宿ってるのって怖いんだよ・・・」

「大丈夫ですよ、どうせこの魔方阵からは出られないんですから  
見てください、出たくてもがき苦しむ悪魔を  
虫かごから出られない哀れな虫ケラのようにですよククク」

「ごめんお前の方がよっぽど怖いわ」

二人の眼前では魔法人の中横たわった人形に宿った悪魔が動こうとするも

魔法人の力に押さえつけられビクビクとかすかに手足を震わせていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6778o/>

---

魔術師とロザリオ

2011年10月6日17時09分発行